

造形表現分野の授業における教授内容の提案

—保育士試験の分析をととして—

Proposal of Educational Contents in Classes in the Field of Artistic Expression

: Through Analysis of the Nursery Teacher Examination

宮城 正作*

Masanari MIYAGI

要約：

本稿の目的は、保育士試験「保育実習理論（造形表現分野）」の分析・考察をととして、造形表現分野の授業において教授する「標準的な知識と技能」を提案することである。本稿では、保育士試験で出題される問題を、「発達過程」、「色彩理論」、「材料・用具」、「保育所保育指針」、「技法」、「イラスト問題」、「児童文化財」、「作品鑑賞」、「デザイン」、「造形要素」の各テーマに分類し、カウントしてその重要度を示した。さらに、その結果を考察し、造形表現分野の「標準的な知識と技能」を提案した。その提案を端的にまとめた内容を以下のア）～エ）に示す。

ア）制作経験をとおして知識や技能を形成できる。

イ）材料・用具・技法について保有する知識を造形的な場面で活用できる。

ウ）造形表現の発達過程を理解し、ア）・イ）に挙げる知識・技能を活用して、造形的な場面で必要な環境を構成できる。

エ）保育所保育指針の内容を理解し、幼児造形活動のねらいや内容を設定できる。

キーワード：保育士試験、造形表現、保育内容の理解と方法

Nursery Teacher Examination, Artistic Expression, Understanding and Method of
Contents for Early Childhood Care and Education

1. はじめに

(1) 問題と目的

本稿の目的は、保育士試験「保育実習理論（造形表現分野）」の分析・考察をととして、造形表現分野の授業において教授する「標準的な知識と技能」を提案することである。

造形表現分野の授業は、保育の5領域において、とくに領域「表現」と関係が深い分野である。よって、教授内容は、子どもの感性や表現する力、創造性などを育むために必要な知識や技能が中心となる。ただし、造形表現分野の具体的な教授内容は、「各養成校や授業担当によっても、教授する内容は担当

* 長野県立大学健康発達学部こども学科 講師

Lecture, Department of Child Development and Education, Faculty of Health and Human Development,
The University of Nagano

者任せ」(松下, 2016)、『『造形表現』という科目の目的や内容に対する『拘束力』は少なく、授業は担当の教員に委ねられる部分が多く、シラバスを見ても各教育機関によってその内容は多種多様である」(小笠原, 2012)という状況である。このような状況を良い悪いという視点で安易に語ることはできないが、少なくとも、このような教授内容のばらつき(多種多様さ)によって、受講者に不利益が生じてはならないと考える。後述するが、このような教授内容のばらつきは恣意的な要素による部分も多く、受講者が身につける知識や技能に差が生じている可能性は否定できない。したがって、造形表現分野の授業において教授する「標準的な知識と技能」を提案することは、担当教員が授業を構成する際の手掛かりとなるとともに、その授業の受講者にとっても有益だと考える。

(2) 保育士試験を分析する意義

前節で述べたように、造形表現分野で教授される内容は、各保育者養成校や各教員によってばらつきがある。このようなばらつきをある程度修正するものとして、教科用図書(以下、教科書という)が挙げられる。造形表現分野で教科書として用いられる書籍には、理論と実践をあわせて紹介したものが多い。たとえば、槇(2008)においては、造形表現分野に関する理論や豊富な実践の紹介に加えて、指導方法や指導案の書き方などが詳細に示されており、保育における造形表現分野の教科書として有用なものだといえる。ただし、問題は、このような書籍を教科書として採用したとしても、その教科書のどの単元や内容を教授するのかはあくまでも担当教員の裁量による、ということだ。周知のように、高等教育で用いられる教科書は、初等・中等教育で用いられる教科書のように、文部科学省などの公的な機関による検定は課せられていない。したがって、どのような書籍を教科書として採用するかも、その教科書のどの単元や内容を教授するのかも、やはり教員次第ということになる。

また、保育者養成校で造形表現分野の授業を担当する教員は、美術系大学・学部出身者が多く、保育者養成校や教員養成校の出身者はさほど多くない。さらに、従来の専門も、油画や日本画、版画や彫塑、現代アートなどを専攻していた者が多く、学生時代から造形教育を主として研究してきた(学んできた)教員はきわめて少ない。つまり、造形表現分野を担当する教員は、保育や幼児教育に対する専門的かつ系統的な教育を受けていない者がほとんどなのである。したがって、教科書の選定やどのような内容を教授するのかといった問題については、その教員の経験や考え方、嗜好といった恣意的な条件に因るところが大きいといえる。とくに、美術系大学・学部出身で、保育者養成校に初めて着任した教育経験の浅い教員は、それら恣意的な条件によって授業内容を構成しなければならない状況にある。

このような状況のなか、造形表現分野の「標準的な知識と技能」を提案するうえで筆者が着目したものが、保育士試験である。保育士試験は、各都道府県で毎年1回以上実施され、その試験に合格することにより保育士資格を得ることができる(児童福祉法第十八条の六および八によって規定)。吉見(2001)によれば、保母養成校が非常に少なかった時代に、保母資格者を確保するために設けられた制度、ということだ。また、この保育士試験は都道府県知事が行うことになっているが、都道府県知事が指定する「指定試験機関」に委託することも認められている。吉見は、保育士試験の課題として、都道府県ごとに試験問題の内容や難易度が異なっていたり、試験問題自体が非公表の自治体があったりすることなどを挙げていたが、平成20年より、指定試験機関である社団法人全国保育士養成協議会(現在は、一般社団法人全国保育士養成協議会。以下、全国保育士養成協議会という)が、すべての都道府県の保育士試験を受託し、実施している。このことによって、保育士試験の試験問題は全国で共通のものとなり、さらに、その試験問題は全国保育士養成協議会のWebサイトで公表されるようになっている。つまり、現在(平成30年)行われている保育士試験は、全都道府県知事の委託を受けて、1つの指定試験機関が統一的な試験を課す形式となっており、国家試験に準ずるような役割を担っている、ということだ。

このような全国で共通の試験が課されるようになってからまだ10年程度とはいえ、保育士資格を得るために必要な知識や技能が全国的な規模で一貫して示されたことは、これまでになかったことである。ただ、このような全国共通の試験が実施される以前も、保母試験や保育士試験を実施するにあたって、厚生省や厚生労働省から実施要領が通知されていた。しかし、出題範囲を端的に示すにとどまり、保育士として保有すべき具体的な知識や技能を明示するものではなかった。たとえば、平成15年に示された保育士試験実施要領（厚生労働省雇用均等・児童家庭局長, 2003）では、造形表現分野に関わる出題範囲として、「B 保育実習実技」の項目に「課題に対する絵画・制作等」と示されるのみで、どのような知識や技能が必要なのかはこれ以上具体的に示されていない。つまり、造形表現分野において、「試験問題」という形式であっても、現在の保育士試験のように、保育士として保有すべき具体的な知識や技能を一貫して示した「データ」はないのである。

以上のことから、造形表現分野の「標準的な知識と技能」を提案するために保育士試験の分析を行うことは、有用な方法であると考ええる。また、造形表現分野において、本稿のように保育士試験の分析を行った先行研究を確認できないことから、試験問題をデータとして捉えなおして示すことは、のちの研究に資するものだとも考える。

(3) 保育士養成課程の見直しにかかる造形表現分野の扱いについて

保育士養成課程における造形表現分野の授業は、これまで主に、教科目「保育の表現技術」や教科目「保育内容演習」において開設されていた。しかし、保育士養成課程の基準となる通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部が改正され（厚生労働省子ども家庭局長, 2018）、両教科目ともにその目標や内容に変更があった。とくに、「保育の表現技術」については、その名称が「保育内容の理解と方法」に改められるなど、大きな変更が加えられている。

旧教科目の「保育の表現技術」では、目標の1つとして、造形表現に関する知識や技術（技能）の習得が掲げられ、その目標を達成するための内容も記載されていた。しかし、新教科目の「保育内容の理解と方法」では、「造形表現」という文言は、目標の欄にも内容の欄にも記載されていない。さらに、この変更は、「造形表現」という文言に限ったことではなく、「音楽表現」や「身体表現」、「言語表現」などの文言についても同様の扱いとなっている。この変更はおそらく、各表現分野の視点からのみ子どもの生活や遊びを捉えるのではなく、それら各表現分野が互いに視点を共有することで、より柔軟に子どもの生活や遊びを捉えることの必要性を強調しているのだと推測する。こうした捉え方は、様々な知識や技能、表現方法に境界を設けて、概念的に世界を捉えようとする大人の視点よりも、複合的で有機的に世界を捉える子どもの視点により近いものだといえるだろう。また、実際の保育の場面では、各表現分野の知識や技能が入り混じって活動が行われることが多く、そのほうが保育の実態に即した自然な考え方だともいえる。したがって、今後は、各表現分野の教員がより密に連携して、新教科目「保育内容の理解と方法」における授業を担当していく必要があると思われる。

ただ、一方で、上記のような捉え方や視点が重要視されるとはいえ、造形表現分野に固有の知識や技能が不要になるわけではない。「造形表現」などの各文言が削除されたことは、各分野の垣根が取り払われ、より柔軟に授業内容を構成できるようになった、というポジティブな意味である。それは決して、個々の分野がもつ固有の知識や技能を否定するネガティブなものではないはずだ。むしろ、各表現固有の知識や技能はこれからも研究され、蓄積されていくべきである。そして、そのような固有の知識や技能を共有し、活かしあいながら、より複合的で有機的な知識や技能を受講者に教授していくことが大切だといえる。したがって、造形表現分野の授業における本稿の提案は、保育士養成課程の見直し後も有用であると考ええる。

2. 方法

(1) 分析対象

①対象とした試験について

分析対象とした保育士試験は、全国保育士養成協議会の Web サイト（全国保育士養成協議会, 2018）で公表されている平成 23 年から平成 30 年までの 14 試験とした（表 1）。ただし、対象とした試験は、筆者が平成 28 年から当該 Web サイトを通じて収集したものであり、現在（平成 30 年 12 月）では閲覧できない試験もある。保育士試験は、平成 27 年度までは原則年 1 回実施されていたが、保育士不足の解消を目的として、平成 28 年からは前期・後期を設けて年 2 回実施されている。また、自然災害などにより一部地域で実施が困難になった場合には、再試験が行われたことがあり、その試験も分析対象とした。

表 1 分析対象の試験と問題数

No.	試験年等	問題数	No.	試験年等	問題数
1	平成 23 年	6	8	平成 27 年（地域限定）	6
2	平成 24 年	6	9	平成 28 年（前期）	6
3	平成 24 年（沖縄県・再試）	6	10	平成 28 年（後期）	5
4	平成 25 年	6	11	平成 29 年（前期）	5
5	平成 26 年	6	12	平成 29 年（後期）	6
6	平成 26 年（一部地域・再試）	6	13	平成 30 年（前期）	6
7	平成 27 年	6	14	平成 30 年（後期・地域限定）	6

②対象とした科目について

造形表現分野に関わる試験科目は、筆記試験の「保育実習理論」と実技試験の「保育実習実技」であるが、本稿では筆記試験の「保育実習理論」から出題された問題のみを対象とした。実技試験である「保育実習実技」を分析対象から除外する理由は次のとおりである。第一に、筆記試験の問題と実技試験の問題を分析対象として同列に扱うことは適切ではないということ。第二に、「保育実習実技」の造形表現分野の問題は、「保育の一場面を絵画で表現する」という内容で一貫しており、とくに分析を要しないということ。くわえて、分析を行うにしても、解答（合格作品など）が公表されておらず、分析に必要な情報が乏しいことなどが挙げられる。実技試験の試験内容を分析することで有益な情報が得られる可能性は否定できないが、上記に挙げた理由から本稿では、筆記試験の問題に限って分析を行う。

③対象とした問題について

試験科目「保育実習理論」の出題範囲は、保育士試験実施要領に示されている。その具体的な出題範囲は、教科目「保育内容の理解と方法」、「保育内容総論」、「保育内容演習」、「保育実習Ⅰ」、「保育実習指導Ⅰ」、「保育実践演習」、「保育者論」、及び「保育の計画と評価」の内容である。そのため、試験科目「保育実習理論」の問題には、造形表現分野以外の問題も含まれることになる。よって、「保育実習理論」で出題される問題のなかから、造形表現分野の問題と、そうでない問題とを選別する必要がある。たいていの問題については、対象となる問題かどうかを峻別できるので、ここでその基準をとくに設け

ることはしない。ただし、次に示す問題については選別が難しい点があるので、その基準を明確にする。

試験科目「保育実習理論」においては、児童文化財に関する問題が頻繁に出題されている。具体的な出題内容は、絵本、紙芝居、詩、ペープサート、エプロンシアター、パネルシアター、伝承遊びなどについてである。ただ、保育士試験で出題されるこれら児童文化財に関する問題は、造形表現分野以外の視点から出題されることがある。とくに、言語表現分野に関する問題が多く、両分野の問題を区別する明確な基準が必要である。したがって、本稿では、次の i) ～iv) の基準を設け、児童文化財に関する問題のなかから本稿の分析対象とする問題を選んだ。

- i) 絵本や詩、童話などの作者や起源のみを問う問題は対象としない。
- ii) 紙芝居やシアター系文化財の演じ方、絵本の読み方、留意事項のみを問う問題は対象としない。
- iii) 提示された児童文化財の制作方法を問う問題については対象とする。
- iv) 造形の三要素「色、形、素材」について問う箇所が一部でも認められれば対象とする。

i) ～iii) については明確な基準だが、iv) についてはやや曖昧な基準となっているので、具体例を示して、どのように筆者が判断したのかを明示する。たとえば、以下の平成 29 年後期試験「保育実習理論」問 11 の問題は、素材について言及した下線部の文言を含むことから、iv) の基準に照らし、本稿の分析対象に含めた。(下線部は筆者による。問題文中で示されている「組み合わせ」は筆者により省略)

問 11 次の【Ⅰ群】の用語と【Ⅱ群】の記述を結びつけた場合の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

【Ⅰ群】

- A エプロンシアター
- B ペープサート
- C パネルシアター

【Ⅱ群】

- ア 付着性の高い素材に描かれたキャラクター等を広い背景の中で動かすことができる。
- イ 英語の「紙人形劇」が、語源ともいわれている。
- ウ 保育者が着用したものを舞台として使用する。

一方で、以下の平成 29 年前期試験「保育実習理論」問 11 の問題は、本稿の分析対象から除外した。その理由は、以下の問題では、問題文中に造形の三要素に関する記述がみられるものの、そのこと自体が直接問われているわけではないからだ。

問 11 次の【説明】を読んで、【設問】に答えなさい。

【説明】

『ぼくのくれよん』

この絵本は、ぞうが鼻で大きなクレヨンを持って、びゅーびゅーと大きな絵を描くお話です。ダイナミックな展開と自由な発想、大きな画面構成、そして色の対比を利用した鮮やかな色使いで、

子どもたちも大好きな絵本の一つです。

【設問】

この絵本の作者の『ぼくのくれよん』以外の絵本の題名として正しいものを一つ選びなさい。

- 1 『はらぺこあおむし』
- 2 『おおきなかぶ』
- 3 『こんにちは！へんてこライオン』
- 4 『きんぎょがにげた』
- 5 『だるまさんが』

さらに、上記と同じような理由から、平成 28 年後期試験「保育実習理論」問 11 の問題も分析対象から除外した。また、平成 26 年試験「保育実習理論」問 14 では、問題文中に色のコントラストについての記述があるものの、問題の文脈上、明らかに言語表現分野に関する問いなので、分析対象からは除外した。

以上のような条件で問題を選定した結果、本稿では 82 問を分析対象とした（表 1）。

(2) 分析方法

本稿では、各問題に出題テーマを付して、テーマごとの出題数をカウントしてまとめ、造形表現分野で求められている知識と技能を分析した。テーマ名とそのテーマの内容については表 2 に示す。

表 2 テーマ名とテーマの内容

テーマ名	テーマの内容
発達過程	造形表現の発達過程に関する問題
色彩理論	色彩理論に関する問題
材料・用具	材料と用具に関する問題
保育所保育指針	保育所保育指針に関する内容で、とくに造形表現分野に関する問題
技法	造形技法に関する問題
イラスト問題	イラストを見て答える問題のなかで、とくに造形物の仕組みや動きを読み取って答える問題
児童文化財	児童文化財に関する問題
作品鑑賞	美術作品の鑑賞に関する問題
デザイン	デザインに関する問題
造形要素	造形要素に関する問題

テーマ名を付し、そのテーマごとに各問題を分類すること（以下、テーマ設定という）は、筆者 1 人で行った。このようなテーマ設定を単独で行う場合、カテゴリー化に偏りが生じる懸念がある。ただ、本稿では、分析対象が毎年実施されている資格試験という性格上、出題される問題の内容や構成は出題時にすでに構造化されているので、単独でのテーマ設定でも分析結果に支障が生じるほどの偏りはないと考えている（出題傾向は、平成 23 年試験から平成 30 年後期試験まで大きく変わっていない）。

しかし、「デザイン」と「造形要素」の2テーマについては、その妥当性がほかのテーマに比べて低い。その理由は、それらのテーマに分類した各問題の傾向が特殊であり、ほかのテーマほど統一的な傾向がないためである。なお、それら各問題を、「その他」というテーマを設けて分類したほうがよい可能性もあるが、テーマ名から問題の傾向をイメージしやすくするために、あえて「その他」のテーマ名は設けなかった。また、「デザイン」に分類した問題数は4問、「造形要素」に分類した問題は1問と、ほかのテーマに比べて少数だったので、本稿での分析結果に支障はないと判断した。

また、問題内容についてより詳しく分析・考察するために、テーマの下位分類としてサブテーマを設けた。サブテーマについては次章で詳述する。

3. 結果

各テーマの出題数と出題試験数、サブテーマをまとめたものを表3に示す。

出題数は、対象とした14試験中に出現された（読み取れた）各テーマの合計数を表している。留意点としては、「発達過程」や「色彩理論」のように、分析対象の全試験数（14試験）以上の出題数（両テーマともに15回）がカウントされているものがあるということだ。この理由は、同一試験内で同じテーマによる問題が複数確認できたり、1つの問題に対して複数のテーマが読み取れたりしたためである。たとえば、平成23年試験「保育実習理論」では、「発達過程」というテーマを問8と問11の2問に読み取ることができた。また、平成24年沖縄再試験「保育実習理論」問11では、1つの問題で「児童文化財」、「材料・用具」、「技法」の3つのテーマが読み取れた。各問題をどのようにテーマごとに分類したのかは、表4に詳しく示す。

出題試験数は、各テーマが出現された試験の数を表している。たとえば、「材料・用具」は、全14試験中12試験で出現された（読み取れた）ことになる。出題数と同様に、各テーマの重要度の指標となる項目である。

表3 各テーマの出題数・出題試験数とサブテーマ

テーマ名	出題数	出題試験数（全14回）	サブテーマ
発達過程	15	14	平面表現 [13] 立体表現 [2]
色彩理論	15	14	—
材料・用具	14	12	粘土 [4] 描画材 [3] 紙 [2] はさみ [2] 接着用材料 [2] 筆 [1] げんのう [1]
保育所保育指針	12	11	—
技法	12	10	モダンテクニック [7] 粘土 [5] 版画 [1]
イラスト問題	10	10	くす玉 [1] ポップアップカード [1] 影絵 [1] 折り紙あそび [1] 折り紙 [1] ペーパーサート [1] クランク [1] ぶんぶんごま [1] やじろべえ [1] パッチンカエル [1]
児童文化財	6	6	絵本 [3] シアター [3]
作品鑑賞	3	3	—
デザイン	4	4	用語 [2] 形体 [1] サイン計画 [1]
造形要素	1	1	—

サブテーマはテーマの下位分類として設けたものであり、表3で示すサブテーマの直後の〔〕内の数字は出題数を表している。「材料・用具」のテーマのように、出題数（14回）と各サブテーマの〔〕内の数字を合計した数（15回）が合わないものがあるが、これは1つのテーマに対して複数のサブテーマが読み取れた場合があったためである。たとえば、平成25年試験「保育実習理論」問9のテーマは「材料・用具」であるが（表4）、この問題は「接着材を用いる際の留意点」と「はさみを扱う際の留意点」に関する問題であったので、「接着用材料」と「はさみ」の2つのサブテーマを挙げた。サブテーマは、本稿における考察に際して、筆者が有用だと判断したテーマについてのみ挙げている。なお、表3のテーマ名は出題数の多い順に上から並べている。ただし、「デザイン」と「造形要素」については、先述したように「その他」の項目としての意味合いが強いことから、下位に位置づけている。

4. 考察

(1) 発達過程

「発達過程」は出題数15回・出題試験数14回と、保育士試験において毎回出題されている重要度の高いテーマである。

「発達過程」は、平面表現の発達過程と立体表現の発達過程に大別できる。保育士試験では、出題数15回中13回が平面表現の発達過程、2回が立体表現の発達過程となっている。ただ、この出題数の違いは重要度の違いではないと考える。平面表現の発達過程は、立体表現の発達過程よりも研究が進んでおり、蓄積された知識や情報が多い。よって、これら出題数の違いは、問われる知識において、平面表現の発達過程のほうが立体表現の発達過程よりも幅広く、多いためだと考える。また、前者のほうが比較的研究が進んでいるので、問題が構成しやすいなどの技術的な理由もあるだろう。したがって、平面表現の発達過程も、立体表現の発達過程も、出題数にみられるほどの重要度の差はないので、両内容ともに相違なく教授すべき知識である。

(2) 色彩理論

「色彩理論」は出題数15回・出題試験数14回と、保育士試験において毎回出題されている重要度の高いテーマである。

保育者を目指す受講者がなぜ色彩理論を学ぶのかということについては、留意すべき点がある。幼児造形活動において、色彩理論を子どもに教えることは通常考えにくいことである。少なくとも、活動の「ねらい」として設定することはない。つまり、色彩理論に関する知識を子どもに教えるために受講者はこれらのことを学ぶのではない、ということだ。

色彩理論は、たとえば造形活動を立案する際に役に立つ。ここでは、フィンガーペイントの活動のために絵の具を準備するという場面を想定して、色彩理論がどのように造形活動に役に立つのかを考えてみる。フィンガーペイント用の絵の具は、一般的な水彩絵の具やポスターカラー、アクリル絵の具などでは代替しにくく、専用の絵の具を購入する必要がある。また、フィンガーペイントは身体を大きく使った描画活動なので、大量の絵の具が必要となるが、何色も用意すると費用がかさばることになる。しかし、色の三原色に関する知識を有していれば、「赤・青・黄」の3色を用意することで、それら3色の混色によってさまざまな色を表現できることがわかる。つまり、色の三原色に関する知識を有することで、材料費を効果的に節約できるということだ（実際の色の三原色は「シアン・マゼンダ・イエロー」だが、保育士試験では「赤・青・黄」としている）。もちろん、たんに材料費を節約するためだけに色彩理論を学ぶのではない。園内のサイン計画や壁面装飾においても必要な知識であるし、ときには子どもの求めに応じて絵の具を混色することもあるだろう。それほど高度な知識は必要ないが、色彩

表 4 各問題のテーマ

試験年等	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11	問 12
平成 23 年	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	デザイン	作品鑑賞／発達過程	児童文化財
平成 24 年	保育所保育指針	発達過程	技法	色彩理論	材料・用具	技法
平成 24 年 (沖繩)	発達過程	色彩理論	技法	材料・用具	児童文化財／材料・用具／ 技法	色彩理論／デザイン
平成 25 年	保育所保育指針	発達過程	材料・用具	色彩理論／児童文化財	イラスト問題	造形要素
平成 26 年	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	材料・用具	イラスト問題	児童文化財／技法
平成 26 年 (再試)	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	材料・用具	デザイン	児童文化財／技法
平成 27 年	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	技法	材料・用具	イラスト問題
平成 27 年 (地域限定)	発達過程	色彩理論	技法	作品鑑賞	材料・用具	イラスト問題
平成 28 年 (前期)	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	技法	材料・用具	イラスト問題
平成 28 年 (後期)	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	技法	—	イラスト問題
平成 29 年 (前期)	発達過程	色彩理論／作品鑑賞	技法／材料・用具	材料・用具	—	イラスト問題
平成 29 年 (後期)	保育所保育指針	発達過程	保育所保育指針	材料・用具	児童文化財	イラスト問題
平成 30 年 (前期)	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	技法	材料・用具	イラスト問題
平成 30 年 (後期・地域限定)	保育所保育指針	発達過程	色彩理論	イラスト問題	材料・用具	デザイン／色彩理論

理論は造形表現の基礎中の基礎なので、将来、子どもの造形活動を支援・援助する者として、一定程度の知識は身につけておくべきである。

(3) 材料・用具

「材料・用具」は出題数 14 回・出題試験数 12 回と、高頻度で出題されている重要度の高いテーマである。サブテーマをみると、粘土、描画材、紙、はさみ、接着用材料、筆、げんのうなどについて問われている。より詳しく問題を分析すると、粘土は、土粘土、油粘土、紙粘土、小麦粉粘土の 4 種類について問われている。また、描画材は、クレヨン系、絵の具、マーカーに関する問題に細分でき、さらに、クレヨン系では、クレヨン、オイルパステル、パステルについて、絵の具では、アクリル絵の具、ポスターカラー、水彩絵の具について、マーカーでは、油性マーカーと水性マーカーについて、それぞれの特徴や使い分け方が主に問われている。そのほかのサブテーマである紙、はさみ、接着用材料、筆、げんのうについても、その特徴や種類、扱い方に関する留意点が問われている。本テーマに関する問題でとくに良問だったのが、平成 29 年前期「保育実習理論」問 10 のはさみに関する問題で、はさみを表した 4 点の図のなかから右手用のはさみを 2 点選ぶ、というものであった。

右手用と左手用のはさみがあることは、多くの者が知っている一般的な知識だろう。しかし、本問は、そのような一般的な知識だけではなく、はさみの原理についても言及した問題であった。ただ、本問を良問だと考える理由はたんに、一般的な知識だけではなく、その原理まで問う深い問題だからだ、ということではない。本問が良問だといえるのは、その原理が右手用・左手用のはさみを実際に区別するために必要な知識だからである。はさみに右手用と左手用のものがあることを知ってはいても、その区別を実際に行うことができなければ、保育者として子どもに適切なはさみを提供することは難しい。この問題は、その点を的確についてきた「実用的な問題」といえる。さらに、本問は、はさみを表した図から解答を導くという点で、実際にはさみを選ぶ場面に相当しており、出題形式としても的確であった。

このような問題からいえることは、保育者は材料や用具に対する知識をたんに有していればよいのではなく、保育者にはその知識を適切に「活用できる」という技能が求められている、ということだ。たとえば、前節の「色彩理論」のテーマで挙げたフィンガーペイントの例に倣えば、色の三原色について知っているだけでは不十分で、その知識を活用して必要な絵の具を用意できなければならない、ということである。

造形表現分野を担当する教員にとって盲点なのが、知識を有しているということと、その知識を活用するということは別のことだ、という点である。つまり、造形的な知識を受講者に教授したとしても、その知識を受講者が実際に活用できるかは別話、ということだ。美術を専門としてきた教員自身は、保有する知識を活用して適切な材料や用具を選択するという技能を長い経験のなかで深化させているので、そのことが訓練を要するような技能であることに気づきにくい。しかし、そのような造形的な技能は、自然に備わっている能力ではなく、経験をとおして身につけるものである。したがって、造形経験が浅い受講者が造形的な知識を適切な場面で活用するということは、決して容易なことではない。美術を専門としてきた教員が気づきにくいこの困難さを理解したうえで、材料や用具についての知識、そして、その知識を活用して適切な選択ができる技能が受講者に備わるように、担当教員は造形表現分野の授業を計画する必要がある。

(4) 保育所保育指針

「保育所保育指針」は出題数 12 回・出題試験数 11 回と、高頻度で出題されている重要度の高いテーマである。とくに、造形表現分野においては、「保育の内容」の領域「表現」に関する内容から出題されている。出題形式は穴埋め形式での出題が圧倒的に多い。具体的には、保育所保育指針の文言が上記

の範囲から一部抜粋されて示されるが、ところどころ空欄となっているので、その空欄にあてはまる記述を選択肢から選ぶ、という形式である。

ただ、この穴埋め形式の出題方法は、保育所保育指針の「暗記」が重要だ、という誤解を招きかねない出題形式だと考える。保育所保育指針の文言を正確に「暗記」しているということと、保育所保育指針の内容を的確に「理解」しているということは、実際は別のことである。したがって、保育所保育指針の文言を正確に覚えているかということよりも、その内容を的確に理解しているか、ということが問われるべきだと筆者は考える。この点に関して、以下の平成 29 年後期「保育実習理論」問 9 の問題は、穴埋め形式の問題とは異なり、保育所保育指針で示す内容自体を問う問題として良問だと考える。(問題文中で示されている「組み合わせ」は筆者により省略)

問 9 次の文は、保育所における色に関する活動の内容や配慮等である。「保育所保育指針」第 3 章「保育の内容」に照らし、適切な記述の組み合わせを一つ選びなさい。

- A 生活の中で、様々な色に気付いたり、感じたりできるように、楽しく「色鬼遊び」を行った。
- B 季節の変化を考慮して、「壁面装飾」の色を工夫した。
- C 「色水遊び」で数種類の色を混ぜ、できた色水を透明な容器に入れて飾った。
- D 「色カード」を用いて、たくさんの色名を正確に覚えるように指導した。
- E 色の識別ができるように、「色立体」を用いて色の体系を説明した。

保育所保育指針の文言を暗記することは無意味だとまではいえない。しかし、実際の保育においては、さほど重要なことではないと考える。なぜなら、あいまいな部分があれば、保育所保育指針を直に手に取って確認すればよいだけのことだからだ。おそらく、穴埋め形式で出題されるというのは、出題上の技術的な面によるところが大きいのだと推測する。したがって、穴埋め形式のように、文言の微妙な差異を問うような問題を多少間違えても、さほど気にする必要はないだろう。一方で、上記の問題で、選択肢 D や E を選択するということは、明らかに保育所保育指針の内容に対する理解が不足しているといえる。

保育所保育指針に関する出題が頻繁にあるということは、当然ながら、造形表現分野においても保育所保育指針の的確な理解が欠かせない、ということだ。ただし、そのような理解は、保育所保育指針の文言をたんに一言一句覚えることで実現するものではない。造形表現分野の授業を担当する教員は、保育所保育指針の内容に基づいた造形活動の在り方について、受講者が的確に理解できるように配慮した授業を計画する必要がある。

(5) 技法

「技法」は出題数 12 回・出題試験数 10 回と、高頻度で出題されている重要度の高いテーマである。サブテーマをみると、モダンテクニックと粘土に関する問題が主である。

モダンテクニックに関する問題は、各技法の手順や特徴などからその技法名を答える、という形式の問題が多い。また、絵本に関連して出題されることがあり、その際は絵本作家のエリック・カールやレオ・レオニなど、モダンテクニックを駆使した作家と結びつけて問われている。粘土については 5 問出題されているが、そのうち 4 問が焼成可能な土粘土に関する問題で、焼成までの手順や留意点を問う問題となっている。また、粘土に関する残りの 1 問は小麦粉粘土についてで、小麦粉粘土をつくる際の手順や留意点に関する内容であった。

モダンテクニックに関する問題の傾向から指摘できることは、保育者を目指す受講者はモダンテクニ

ックに必要な材料や用具、手順や留意点などについての確に理解しておく必要がある、ということだ。つまり、受講者自身でモダンテクニックを用いた造形活動を実際に展開できるようになることが大切だ、ということである。モダンテクニックは幼児でも楽しく簡単に行えるというだけではなく、たんに描くだけでは得られない豊かな表現効果を有する技法なので、受講者においては、できるだけ多くの技法について学ぶことが望まれる。

なお、本稿では便宜上、「技法」や「材料・用具」、「発達過程」など、複数のテーマに分けてテーマごとに考察を行っているが、実際はそれらが有機的に結びついて知識や技能が形成されているので、その点は留意が必要である。幼児造形活動において、モダンテクニックを展開する場合も、たんにその技法の手順だけを覚えていればよいのではなく、子どもの発達や特徴を理解して適切な材料や用具を準備したり、ときには手順を構成しなおしたりすることが必要となる。

粘土に関する問題は、土粘土が主であり、土粘土を用いた造形活動の重要性が理解できる。ただ、土粘土を焼成するためには、十分な設備と知識、そして時間が必要であり、幼児造形活動においてはハードルが高い活動の1つである（ただし、出題された問題のなかには、「野焼き」を用いた方法もあった）。保育者養成校の授業においても、設備などの問題から、焼成までを行う授業はさほど多くないと推測する。土粘土を用いた造形活動の楽しさや意義は十分に理解できるが、このような授業をすべての保育者養成校で実施することが望ましいかについては、判断が難しいところである。筆者自身は、土粘土という特定の種類の粘土にこだわることなく、他の種類の粘土も含めて、各保育者養成校の実情にあった授業を実施することが現実的であると考ええる。

(6) イラスト問題

「イラスト問題」は出題数10回・出題試験数10回と、高頻度で出題されている重要度の高いテーマである。なお、イラスト問題は分析対象の試験において、平成25年試験から初めて出題された形式だが、平成26年の再試験を除くすべての本試験で出題されており、上記の数字以上の重要性がうかがえる。イラスト問題のサブテーマは、くす玉、ポップアップカード、影絵、折り紙あそび、折り紙、ペープサート、クランク、ぶんぶんごま、やじろべえ、パッチンカエルなどである。イラスト問題の出題形式は、サブテーマに示した各造形物を表した図（イラスト）からその造形物の仕組みや動きを答える、という形式である。

「イラスト問題」は一見、その特定の造形物の仕組みや動きに関する「知識」を問う問題に思える。もちろん、それらについての知識を事前に有していれば、問題を解くうえで有利ではある。しかし、「イラスト問題」は、知識に関する問題というよりは、受験者の「技能」や受験者の「造形的な経験」に関する問題であると考えられる。「イラスト問題」が知識に関する問題といえないのは、どのような問題が出題されるのかわからないなかで、無数にある造形物の仕組みを事前に調べて知識として覚えておくことは、非効率的なことだからである。また、なにより、そのような事前準備を行わなくても、「イラスト問題」を解くことは可能だといえる。「イラスト問題」で問われている力は、イラストからその造形物の仕組みを理解したり、その造形物をイメージ上で動かしたりする技能である。このような技能は、造形物を実際に制作するという経験によって培われるが、出題された特定の造形物と必ずしも同じものをつくった経験がなくてもよい。造形的な経験が豊かな者であれば、初見の造形物であっても、過去の経験を転用したり、経験によって培ったイメージ力をはたらかせたりすることによって、その造形物の仕組みを理解することができる。つまり、「イラスト問題」で問われているものは、知識というよりは、造形物の仕組みをイメージをとおして理解する技能と、その技能をもたらず造形的な経験値なのである。

このようなことから造形表現分野の授業についていえることはシンプルである。それは、造形的な経

験を受講者にできるだけ多く積ませることが大切である、ということだ。もちろん、座学などで教授する知識が無用だというわけではない。「知識」と制作経験をとおした「技能」の両輪が必要だ、ということである。また、知識は教員によって一律に教授されるものだけではなく、制作をとおして受講者自身が個々に獲得するものも多い。大概の場合、そのように受講者自身で獲得した知識のほうが、教授された知識よりも実際の場面で活用しやすいものである。

(7) 児童文化財

「児童文化財」は出題数6回・出題試験数6回と、中程度の出題数である。サブテーマは、絵本とシアターとなっており、絵本が出題される場合には、その絵本で用いられている技法と関連づけられて出題される傾向にある（本章第(5)節「技法」参照）。シアターでは、パネルシアター、エプロンシアター、ペープサートに関する出題があり、それらの素材や特徴、制作方法について問われている。

「児童文化財」の出題数は中程度となっているが、それは本稿が造形表現分野に限って分析・考察を行ったためである。児童文化財に関する問題自体は、保育士試験「保育実習理論」において、絵本や紙芝居、童話などに関連して毎回出題されている重要度の高いテーマである。また、本稿の性質上、児童文化財を造形表現分野とそれ以外の分野に区別して取り扱ったが、実際の授業では、各分野の視点を共有し、活かしあった内容が望まれる。ただし、児童文化財が保育において重要な内容であっても、造形表現分野の標準的なテーマではないと考える。なぜなら、上記でも述べたように、児童文化財はほかの分野とも関連度が高いテーマであり、造形表現分野固有のテーマではないからだ。換言すれば、「児童文化財」は、造形表現分野の視点からのみ理解するのではなく、そのほかの表現分野や歴史的な視点もふまえて複合的に扱うべきテーマだ、ということである。したがって、本稿では、本テーマの内容を造形表現分野の「標準的な知識と技能」としては位置づけない。

(8) 作品鑑賞

「作品鑑賞」は出題数3回・出題試験数3回と、出題頻度が低いテーマである。出題内容としては、子どもの絵の表現や発達と関連づけて問う問題が2問、もう1問は美術史的な観点がより強い問題であった。なお、問題の選択肢で示されたことのある作家は、レオナルド・ダ・ヴィンチ、スーラ、ゴッホ、ピカソらである。

原始美術から近・現代美術にいたるまで、子どもの表現と美術作品との関係を考察することは意義深いことである。また、一般教養として、美術史に関する知識を一定程度有していることは好ましいことでもあるだろう。ただ、保育者養成校の限られた授業時間のなかで、美術史の範囲まで学ぶことは難しいのが現実である。造形表現分野における選択科目が充実している場合には推奨されるテーマであるが、造形表現分野の標準的なテーマとはいいがたい。このテーマに関しては、各保育者養成校の実情に合わせて教授していくことが望ましいと考える。したがって、本稿では、本テーマの内容を「標準的な知識と技能」としては位置づけない。

(9) デザイン

「デザイン」は出題数4回・出題試験数4回と、出題頻度が低いテーマである。サブテーマは、用語、形体、サイン計画となっている。サブテーマを用語とした問題の内容は、シンメトリーやグラデーションなどのデザインの基礎用語について問う問題であった。また、サブテーマを形体としたものは、ポスター制作において、遠近感を出すための留意点（形体の大小）について問う問題、サブテーマをサイン計画としたものは、ピクトグラムに関する問題であった。

デザインの用語や考え方を理解することは、保育者の造形的な知識や技能を高めるために有意義なこ

とである。ただ、第2章第(2)節「分析方法」でも述べたように、カテゴリー化するには恣意性の高いテーマであり、個々の問題の出題頻度も低いことから、本テーマの内容を「標準的な知識と技能」としては位置づけない。

(10) 造形要素

「造形要素」は出題数1回・出題試験数1回と、出題頻度が低いテーマである。出題内容は、線、形態、色彩、質感などについてであった。本テーマも「デザイン」のテーマと同様に、暫定的なカテゴリーであり、出題頻度も低いことから、「標準的な知識と技能」としては位置づけない。

5. まとめ

造形表現分野の「標準的な知識と技能」として、本稿で挙げたテーマのなかから、「発達過程」、「色彩理論」、「材料・用具」、「保育所保育指針」、「技法」、「イラスト問題」で分析・考察した内容を提案する。なお、本稿では便宜上、これらの知識や技能をテーマごとに独立して扱ってきたが、実際は互いに関連しあって形成される知識・技能であることに留意しなければならない(第4章第(5)節「技法」参照)。これら「標準的な知識と技能」を複合的かつ端的にまとめたものを以下に示す。

ア) 制作経験をとおして知識や技能を形成できる。

イ) 材料・用具・技法について保有する知識を造形的な場面で活用できる。

ウ) 造形表現の発達過程を理解し、ア)・イ)に挙げる知識・技能を活用して、造形的な場面で必要な環境を構成できる。

エ) 保育所保育指針の内容を理解し、幼児造形活動のねらいや内容を設定できる。

なお、上記の「造形的な場面」とは、設定保育における造形活動だけではなく、造形的な側面を含む子どもの遊びや、行事などに際して保育者が行う造形制作など、保育・幼児教育におけるすべての造形的な場面を指している。

本稿では、保育士試験の分析をとおして、造形表現分野における「標準的な知識と技能」を考察し、提案した。このような知識や技能は、造形表現分野の授業において、これまで担当教員の経験や嗜好といった恣意的な条件に基づくことが多かった。しかし、本稿では、保育士試験をデータとして捉えなおすことで、一定の客観性に基づいてそれらを考察できたと考える。ただ、一方で、本稿で提案した「標準的な知識と技能」は、時代とともに意義や方法が絶えず変化する保育や幼児教育において、決定的なものでは当然ない。本稿で提案した「標準的な知識と技能」を基に、さらに今後、造形表現分野において求められる知識と技能について考えを深めていきたい。

【引用・参考文献】

- 小笠原文 (2012)「保育士・幼稚園教諭養成課程における授業「造形表現」の展開」広島文化学園大学学芸部紀要第2巻、p.90.
- 厚生労働省子ども家庭局長 (2018)「『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』の一部改正について」http://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/30-1s2-1.pdf (情報取得 2018/12/31).
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長 (2003)「保育士試験の実施について」(平成30年4月27日子発0427第4号改正現行) https://www.hoyokyo.or.jp/https://www.hoyokyo.or.jp/member/low_search/index.html/151201-300427-2.pdf
- 全国保育士養成協議会 (2018)「過去の試験問題」<http://www.hoyokyo.or.jp/exam/pasttest/> (情報取得日 2018/12/31).

槇英子（2008）『保育をひらく造形表現』萌文書林.

松下明生（2016）「保育者に必要な造形能力についての研究—アンケートから見る保育者が必要と考える造形能力についての検証—」名古屋柳城短期大学研究紀要第 38 号, p.94.

吉見昌弘（2001）「保育士試験の歴史的変遷と今後の課題」県立新潟女子短期大学研究紀要第 38 巻, pp.15-27.